

# 國學院大學學術情報リポジトリ

荷田春満と赤穂浪士

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 根岸, 茂夫, Negishi, Shigeo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000373">https://doi.org/10.57529/00000373</a>

# 荷田春満と赤穂浪士

## 一

元禄十五年（一七〇二）十二月十四日、大石内蔵助良雄ら赤穂浪士が吉良上野介義央邸に討入り、首級を挙げたいわゆる「赤穂事件」の際、国学の始祖荷田春満がこれを支援した事実は、既に古くから知られている。前日の十二月十三日、荷田春満は大石内蔵助の一族大石三平良毅に書状を送り、十四日には吉良義央が在宅しているという情報を知らせた。この書状が、大石内蔵助に吉良邸討入りを決断させる重要な情報の一つとなった

といわれている。

荷田春満は通称羽倉いづき信盛、荷田姓で東丸・春満などと号した。<sup>〔1〕</sup>寛文九年（一六六九）山城伏見の稲荷社の御殿預羽倉（東羽倉）信詮の次男として生まれ、家学の神道・故実・和歌を始め文学・歴史・律令・漢学などを修め社務に携わり、一時妙法院宮に仕えたが、元禄十三年大炊御門経光が徳川家光五十年忌の勅使として江戸に下った時、経光とともに江戸に下り、江戸で国学を教授していた。時に三四歳である。当時は羽倉斎として知られており、検討する史料にもそのように記されるが、本稿では荷田春満と著しておく。

根岸茂夫

荷田春満が赤穂浪士を支援したという逸話は、近世から伝えられていた。すでに春満生前の享保四年（一七一九）片山深淵『赤城義臣伝』巻九には、春満が赤穂浪士の一人堀部安兵衛と昵懇と記され、また弘化二年（一八四五）豊後岡藩の儒者角田九華が著した『続近世叢語』巻之二には、春満が大高源吾に吉良邸の絵図を与えたという逸話が記されている。ただしこれらの逸話は正確ではない。明治期の代表作の一つである福本日南『元禄快拳録』（一九〇九年刊）には春満の逸話はないが、福本が増補・訂正した『元禄快拳真相録』には、「闇中の飛躍」として大石内蔵助と春満との関係を論じている。

福本の著書が刊行された明治末期以降、『赤穂義人纂書』など史料の公開も進んだ。ことに一九二二年に弘前高等学校教授として弘前に赴任した国文学者弥富破摩雄が、大石無人（三平の父）の子孫で旧弘前藩士大石高一郎家の赤穂浪士関係史料を調査し、元禄十五年十二月十三日「大石三平宛荷田春満書状」を発見した。弥富は一九二二年『義士帖』<sup>8</sup>を出版し、大石家に残る赤穂浪士関係史料の写真版を掲載して春満の書状も公開し、本書の後記の冒頭に春満書状の発見を特記している。さらに『近世国文学之研究』に「荷田春満の元禄義拳帮助始末」を著し、この書状を分析して事実の周知に努めた。

この書状を始め諸史料で詳細な検討をおこなった一人に、近代の代表的なジャーナリスト徳富蘇峰がおり、『近世日本国民史』元禄時代中巻義士篇<sup>10</sup>では「隠れたる同情者」の項目を立てて荷田春満を取り上げている。本書では春満の書状を紹介するとともに、弘前大石家文書に存する「富森助右衛門書状」「間瀬久太夫書状」をはじめ、『堀内伝右衛門覚書』『寺坂吉右衛門筆記』などを引用しながら、春満が吉良邸の情報を知らせた事実を確認している。

昭和に入ると、中央義士会編『赤穂義士史料』上巻に『堀部弥兵衛金丸私記』（以下『堀部金丸覚書』と略記）が掲載されて、後述するように春満と赤穂浪士との関係がさらに明確になった。『同書』下巻には「大石三平宛荷田春満書状」も掲載されている。

荷田春満研究においても、赤穂浪士との関係は注目された。戦前東丸神社が発行した『春葉』には「荷田東丸大人と赤穂義士との関係史料」（第一巻一一号、一九三二年）、「荷田春満大人と赤穂義士」（第三巻一一号、一九三四年）などが掲載され、三宅清『荷田春満の神祇道学』<sup>12</sup>にも、やや冷ややかな態度ではあるがこの事実を叙述している。

戦後になってもさまざまな『忠臣蔵』関係書籍が春満と赤穂

浪士の関係を論じており、戦後の関係書籍のうち最も読まれた書物の一つ松島栄一『忠臣蔵』(岩波新書)も春満の援助を論じている。一九六九年には荒尾親成「荷田東丸大人筆蹟のごども」(『朱』七号)に写真版が掲載されて紹介され、一九八二年には佐々木杜太郎校注『大石神社蔵大石家義士文書』に現代語訳とともに掲載され、『神道大系』論説編二十三復古神道(一)荷田春満でも書状と徳富蘇峰の考察を掲載した。ついで赤穂市が編さんした『忠臣蔵』一卷において、『堀部金丸覚書』を用しながら赤穂浪士と春満との関係を論じて、大石三平と春満が弥従兄弟の関係にあったことを明らかにし、大石内蔵助が春満の情報を最も確実なものとして認識していたことを論じている。また林尚右『大石内蔵助秘話』では、春満の京都時代の動向とともに弥富破摩雄により書状が発見され『義士帖』が刊行された経緯を紹介している。

以上のように、荷田春満と赤穂浪士の関係は、近代以降赤穂浪士の研究とともにさまざま論じられるようになったものの、書状そのものが丹念に検討されているとはいえない。

筆者は本年二月、兵庫県赤穂市の赤穂大石神社において、飯尾義明宮司の御高配により元禄十五年十二月十三日付大石三平宛荷田春満書状を調査する機会を得た。以下、書状を史料学的

に考察するとともに、従来検討されることのなかった当時の荷田春満の周辺についても考えてみたい。現在共同研究によって荷田春満を中心とした前期国学の人的ネットワークを考察しているが、本稿はその基礎的作業の一つでもある。

## 二

荷田春満と赤穂浪士の関係を物語る史料に、浪士の一人堀部弥兵衛金丸が著した『堀部金丸覚書』に、討入りの約一ヵ月前に堀部が大石三平から聞いたという記事がある。堀部金丸は堀部安兵衛武庸の養父として知られるが、赤穂藩江戸足軽頭・江戸留守居役を勤め、知行三〇〇石、のち隠居料二〇石を得ており、浪士のうち最高齢で当時七六才であった。『堀部金丸覚書』は、浪士の中でも討入り強硬派の一人であった堀部弥兵衛が、吉良義央の動静を探るために聞き取った内容である。江戸留守居役を経験したことにより、堀部弥兵衛は情報収集に最も長けていた人物であり、その内容は正確なものといえる。長文ではあるが赤穂浪士や大石一族と春満との関係がよくわかる史料であり、以下引用したい。

霜月十三日大石氏入来物語之覚

一中古之茶湯者何之宗丹嫡伝、(長重、老中)小笠原佐渡守様御家来  
 何之宗返弟子、町人中嶋五郎作、本宅ハ京橋近辺三十間  
 堀之内、常之住宅ハ靈岸島ニ而、柳沢様御上り屋敷唯今  
 ハ町屋ニ成候、其内ニ居候由、右五郎作事大石氏学友ニ  
 而哉、三年以來折々講釈之席ニ而出合候由、別懇にてハ  
 無之候へ共、大石氏イヤ従弟程之由緒有之、京稻荷之社  
 家羽倉齋ト申浪人、先年御法事之節齋を大炊御門大納言  
 様被召連御下り、中嶋五郎作ニ此齋儀江戸ニ残り居度旨  
 申候間、其方御願被成と大炊様御頼ニ付、五郎作本宅  
 三十間堀之店ニ而店賃をも不取借置、志事不浅念比ニ仕  
 候由、就夫大石氏事五郎作居宅へも折々被參、出来合之  
 料理杯四五度も振廻ニあひ、尤齋宅にても五郎作と折々  
 参会之由、  
 右之次第故、五郎作・齋兩人共ニ、大石氏一類中此方家  
 中数多有之段能承知、(吉長義忠)ト市噂を右兩人切々咄候、然共  
 心底難計ニ付一門共方々江離散候故、書中も絶し、其上  
 最早何之心懸ケも無之趣ニ相聞候付、聞合も心も曾無之、  
 とさらぬ体にて先之咄を心ろニ付聞届候由、  
 一 当月二日三日比五郎作ト出合候付、時分柄候間方々江茶

湯ニ可被參と大石氏被申候得は、五郎作返答、仰之通候、  
 就夫珍敷事御座、ト市より被聞及候とて茶湯ニ被招候、  
 日限未相極候へ共近日参筈ニ候、此節不思議ト五郎作  
 語候由、

一同去ル六日齋方ニ而五郎作ニ大石氏参会候処、今夕会ト  
 市江參ルと五郎作咄候由、

一 夫ル八日羽倉齋所江大石氏被參、去ル六日弥ト市江被參  
 候哉と相尋候得は、齋返答、六日夕会ニ五郎作参候処、  
 於囲会席出ト市自身之手前ニ而茶をたてれ候由、(ら脱)右之節  
 囲之外ニ侍四五人相見江、刀・脇指をも持居候、路次之  
 内にも少々待相見、如何様用心之体と相見申候、茶湯濟  
 小座ニ而後段出、亭主相伴、其節五郎作申候は、常々御  
 淋敷可有御座と申候へハ、逼塞之体ニ居候故大形彈正方  
 江參居候、彈正屋敷は広手故慰ニ成候、向後は心安ク内々  
 尋參候得との挨拶之由、右後段も日之内ニ相濟候由、五  
 郎作帰候ハ日暮ニ哉、其儀は不相尋候由、

一 ト市事惣髪ニ而ハ無之候へ共長髪之由、挨拶にも病氣ニ  
 て居候故長髪ト断候由、

一 前方之挨拶ニ、世悴事風氣故不懸御目候と断候由、  
 一 囲之作事如形龜相ニ候、其外も及破損壁土甚落たる所も

有之候へ共、修理をも不加様子ニ相見江候、常々住宅候ハ、今少取繕も可在之事ニ候、其上所々不掃除成事共候故、全住宅とハ不被思と、右之次第五郎作斎ニ咄候由、羽倉齋大石氏江物語之由、

○大石氏了簡之趣被申候は、彼屋敷ニ被居候振ニ仕成し候謀にても候哉、但心実茶湯数寄ニ而五郎作を切々被招、打とけられ候ハ、五郎作居宅江夜咄ニ呼候得、忍而可行など、右之事も可在候、左も候ハ、日本一之可為事と被申候、

この史料には、まず赤穂浪士の江戸における支援者であった中島五郎作の話から始まる。中島は茶人山田宗偏の弟子で大石三平の学友でもあり、三年以来講釈の席で出会っていた。大石三平とはそれほど親しくないが、弥や徒兄弟すなわち父母が従妹同士の関係にある羽倉齋こと荷田春満は、伏見稲荷の社家出身の浪人であり、先年徳川家光五十年忌の法事るとき、勅使の大炊御門経光が江戸に伴い、江戸に残るといので中島五郎作に世話を頼んだ。中島は本宅の京橋三十間堀に店賃も取らずに春満を住ませ丁寧に扱った。大石三平は時々中島宅を訪ね、春満宅でも中島と会うこともあった。

中嶋も春満も大石一族や赤穂浪士たちを知っており、「卜市」こと吉良義央の噂をしきりにしたが、大石三平は警戒して、大石の一門は離散し音信もなく、討入りの決意もないと聞いていると返事をしながら、吉良の様子に聞き耳を立てていたという。十一月二・三日ころ、中島は大石三平に吉良から茶会に招かれているが日時は未決定と話し、同六日には春満宅で中島が大石三平に今夕吉良邸の茶会に行くと言っている。

十一月八日、春満宅を訪れた大石三平は、中島が見た吉良邸茶会と屋敷の様子を春満から以下のように教えられた。(一)屋敷の内ですらに囲われた場所で茶会が行われ、吉良自身が茶を立てたが囲いの周辺や路地には武装した侍が警固していた、(二)中島が吉良に寂しくないかと尋ねると、いつも米沢藩主上杉綱憲邸に行き、広くて安心できると答えた、(三)吉良は中島に今後心安く内々に尋ねるように言った、(四)吉良は病氣と称して月代心剃らず、養子の義周も風邪気味としてあいさつに出なかった、(五)囲いの作事は粗雑で壁も剥落し修理もされず、中島は常に住居していれば少しは修繕もするはずで、掃除も行き届かないことから、住居しているとは思えないと感じた。

この話を受けて、大石三平は堀部に、吉良が自分の屋敷に住居していると錯覚させる謀略かもしれないと話し、ただし吉良

は茶道を好んで中島を招いているので、さらに夜話に招かれたり非公式に訪ねることもありうると語って、本懐を遂げること示唆している。

『堀部金丸覚書』には、続いて大石三平が荷田春満を評した記事が次のように見える。

一 羽倉齋事神道・歌道之指南杯いたす様子ニ相聞へ候、前方ト市も逢被申、前出入仕候得共、世上ニ而ト市を専不  
宜唱候故出入如何と、其以来は差扣彼屋敷江不參候、家  
老何之多中<sup>(原)</sup>は弟手故、爾今折節多中方ハ通し仕候と齋咄  
之由、

右之通候間、連々氣被付様ニいたし懸候ハ、彼屋敷之  
様子彼仁何方ニひしト居住との儀など聞届成間敷事共思  
われす候、乍去急々ニ聞懸候てハ、右兩人悪敷了簡いた  
し候てハ還而邪間、元を失候様ニ可相成哉と存候旨、委  
細被申聞候、以上、

春満は神道や歌道などを教授していると伝聞で記されており、ここから大石三平は春満から指導を受けていないことが判る。中島と大石三平が学友と前文にあるのは、別の学問の師匠

がいたのである。ところで春満は吉良邸に出入りしていたが、吉良の世評が悪くなると出入を辞めたが、家臣の松原多中は春満の弟子で、現在でも連絡しあっていると語ったという。『吉良家分限帳』によれば、松原多中は吉良家の家老三人のうちの一で、知行一〇〇石であり、のち討入りでは浪士と闘って負傷している人物である。

その一方で、大石三平は春満や中島に注意していれば吉良邸の様子などが判明する可能性を示唆しているものの、積極的な態度で情報を得ようとすれば、春満や中島が「悪敷了簡」をおこして吉良に通報する疑いもあるので「還而邪間」すなわち障害になると、堀部弥兵衛に話しているのである。

荷田春満が大石三平と弥從兄弟ほどの遠戚関係と記される唯一の史料であり、史料の性格から事実と推定されるが、荷田氏の系図からも大石氏の系図からもその関係は辿れない。『赤穂義士史料』上巻などでは、春満と大石内蔵助が弥從兄弟と指摘するが、史料が指摘するのは三平との関係であり、春満と内蔵助が遠戚には相違ないが関係は辿れない。史料にはそれほど親しいわけではないとあるが、江戸出府の事情など春満についての情報は正確であり、江戸出府直後における春満の生活が判明する。春満は大炊御門経光の紹介で、江戸の有力な呉服商中島

五郎作の住居である京橋三十間堀の屋敷に居住していた。中島は元禄十四年八月九日に、春満の門人帳『蒙神学正伝之約契』<sup>21)</sup>に署名しており、門人帳には四人目に記されるという春満の高弟の一人でもあった。一方春満は、大石一族や赤穂藩浅野家中とも知己が多く、一時は吉良義央の屋敷にも出入りしていた。

彼がさまざまな縁故をたどり、積極的に各方面に歌道や神道・故実などを教授していた様相を窺わせる。江戸に出府した春満は、積極的な活動によって、大名・旗本・陪臣に至るまでの武士、神職から町人までに自身の学問を教授する機会を得ようとしていた。当時における春満の願望は、幕府の歌道指南に就任して家を立てることであり、<sup>22)</sup>高家吉良義央への出入りはその手掛かりでもあった。春満の江戸出府は生涯五度に及び、この最初の出府は元禄十三年から正徳四年（一七一四）まで一四年にわたったが、この間の積極的な交流活動が、のちに春満が幕府の古典籍収集活動や文教政策に関わる前提にもなったといえる。

他方、大石三平や堀部弥兵衛などが春満に警戒心を抱いたのは、そのような積極的な交際関係の拡大を目的の当たりにしていたためなのかも知れない。ただ春満は、自身の願望の手掛かりとなる吉良との関係を捨てて、赤穂浪士の支援に尽力したのである。いずれにせよ討入り一カ月前には、荷田春満や中島五郎

作が赤穂浪士を積極的に支援しようと考えていたにもかかわらず、大石三平や浪士側はまだ懐疑的であった。

### 三

大石三平が荷田春満や中島五郎作から距離を置きつつ連絡を取り合っていた十一月前半、赤穂浪士側は、十一月五日に大石内蔵助が一時滞在していた武蔵橋樹郡平間村から江戸に入り、浪士も集結して武具などを整えており、十一月二十九日には大石内蔵助が「金銀請払帳」をはじめ赤穂開城以来の諸書付を旧主浅野長矩の室瑤泉院に提出し、討入りを待つ態勢に入った。浪士たちもこの時期、暇乞いの書状を各所に遣わしている。<sup>23)</sup>

十一月二十八日、浪士の一人原惣右衛門が大石三平に書状を送り、十二月五日の吉良義央の茶会の確認を依頼したが、開かれなかった。十二月七日には大石内蔵助が大石三平に十日過ぎの茶会の情報を依頼し、<sup>24)</sup>十一日には堀部弥兵衛が、十二日には弥兵衛の養子堀部安兵衛がそれぞれ大石三平に吉良の茶会の情報を依頼している。弥兵衛の書状には、吉良の情報が入手できない焦燥感が如実に示されている。<sup>25)</sup>



大石三平様

馬淵一郎右衛門

二三日は不得御意御物遠ニ御座候、其元弥御堅固ニ被成御座候哉、無人老へも御心得可被下候、然は去ル五日相延候付、重而之会日相定候哉、明朝にても可有之哉と千万無心元存候、今晚方は相知レ可申候へ共、其内御間届被成候ハ、乍御六ヶ敷早々御知せ可被下候、為其如斯御座候、右未相知候ハ、此者急用之使ニ遣候間、御口上ニて御返答可被仰下候、以上、

十二月十一日

馬淵一郎右衛門は堀部弥兵衛の変名であるが、難と柿らの茶会を知らせてほしいと執拗に要求している。翌日の安兵衛の書状は以下のとおりである。<sup>30)</sup>

大石三平様

長江長左衛門

其後ハ不得御意候、御家内御揃御堅固承度奉存候、御両親様宜御心得可被下候奉頼候、然は瀬左殿より之一封とも御届申候、内々之儀一入御頼候との御事候、先日も御面談ニ申たる趣ニ而候、とかく貴様御了簡ニ不過候、心事期面上之時候、以上、

〔元禄十五年〕

十二月十二日

長江長左衛門は安兵衛の江戸における変名であり、この内容にも多少の執拗さと焦りの色が見えているが、ここまで浪士たちの書状に「羽倉齋」の文言は見えていない。ただし、浪士たちから情報を求められた大石三平の情報源が、荷田春満・中島五郎作である以上、間接的に春満に吉良の動向を訪ねるよう依頼したものに他ならないが、浪士たちが春満の存在をどれだけ認識していたのかは不明である。この間、荷田春満や中島五郎作がどのような支援を試みたのか、赤穂浪士側がいかに対応したのかは不明であるが、討入りの直前には浪士側の態度に変化が見られ、春満の情報をしきりに望むようになるのである。

討入り前日の十二月十三日、浪士の一人富森助右衛門が大石三平の父大石無人に宛てた書状に、荷田春満が登場する。<sup>31)</sup>

大石無人様 早々

富森助右衛門

以手紙得御意候、然内々之一儀、彼レニ弥明日客有之候段致承知候得共、無心元候間、齋働ヲ以申来候積りニ付、今日昼過垣見五郎兵衛宿江内々御出被下度候、以上、

十二月十【四】(三)日 正因(花押)

明日吉良邸に客があり茶会が開かれるとの情報が不確かであり、「齋」すなわち春満の働きで連絡があるので、昼過ぎに垣見五郎兵衛こと大石内蔵助宅に来るように願っている。

同日、浪士の一人間瀬久太夫が同じく大石無人に宛てた書状にも荷田春満が登場する<sup>(33)</sup>。

大石無人様 早々 間瀬久太夫

今十三日内蔵助殿江参候用事ハ、齋キ手筋ニ而弥明日吉良殿江客有之候段承候得共、無心許候間、三平殿齋へ参相尋候様にと被申候故、直キニ齋へ参候処、成程客有之候得共未慥旨、明朝齋より案内次第又々其段可申入候、以上、

十二月十三日 正明(花押)

間瀬久太夫は大石内蔵助から、「齋キ手筋」すなわち荷田春満が入手した情報から、十四日に吉良邸で茶会があるというが不確かであるので、大石三平に春満宅を訪れてほしいと伝えるように命じられた。大石三平が直接春満のもとを訪れると、吉良邸に客がありそうだが確実ではないので、明朝に情報が入り

次第春満から連絡があるはずである、と大石無人に書状を送っている。大石無人・三平父子が春満の情報の伝達役になっていることが確認できる。また春満も、吉良の茶会の情報について、独自の経路を持っていたことも判明する。

この二通の時間の関係は不明であるが、富森の書状は無人に内蔵助のもとに来るよう伝え、間瀬の書状は三平を通して春満に連絡を取ったというものである。少なくとも富森の書状は昼前に出ているから、富森の書状によって無人が内蔵助を訪ねたがまだ春満からは情報が入らず、無人が帰宅してから間瀬からまだ正確な情報が入らないと書状を送ったという順で作成されたのであろう。いずれにせよ、大石内蔵助を始め浪士たちの焦燥感がにじみ出ている書状であり、とくに間瀬の書状には「齋」が二度も登場する。討入りの直前になると、大石内蔵助たちは荷田春満を信じ、彼の情報に頼る思いで大きな期待を寄せていたのである。



元禄15年12月13日 大石三平宛羽倉齋 (荷田春満) 書状

四

元禄十五年十二月十三日、浪士たちが吉良邸茶会の情報を中心にして待ちしている中、荷田春満は大石三平に書状を送った。<sup>33</sup>この書状は赤穂大石神社に現存し、弘前の大石家から寄贈された史料の一部であり、「義士手翰」と題された卷子の巻頭にある。本巻は他に堀部安兵衛・堀部弥兵衛・間喜兵衛・潮田又之丞の書状などが収められている。その一部は前掲『義士帖』にも掲載されている。本巻の見返しの部分には貼紙があり、次のように記される。

羽倉斎

幕府  
神道儒者

馬淵一郎右衛門

堀部弥兵衛事、  
於江戸変名、  
堀部安兵衛事、  
於江戸変名、

長江長左衛門

〔朱書〕垣見五郎兵衛トハ良雄変名ナリ、馬淵有、

垣見トハ内蔵介変名之事、

貼紙は近世後期に大石家で記された筆と思われるが、羽倉斎を「幕府神道儒者」と紹介し荷田春満と同一人物とは認識して

いない。当時の知識と近代以降の国学に対する認識との差であろう。

写真を示したが、本巻の巻頭にある荷田春満書状は、縦一五・六センチメートル、横四七・七センチメートルであり、端裏の宛所・差出所の幅三・三センチメートルが切り取られ、表に貼られている。また元の形態は切封であり、宛所の「石」の部分に封紙の帯が巻かれた跡があり、尚々書（追而書）一行目の上部に、裏に薄く封の墨の跡が確認できる。封をしたのちに「大石三平様」と宛名を書き署名していたことが確認できる。

書状の文言は以下のとおりである。

〔朱書〕大□三平様 羽倉斎

尚々、彼方ノ儀は

御手簡拝見仕候、一昨日も

十四日の様ニちらと承候、以上、

御状被下候得とも、会席故

御報不申入失本意候、

先以餅壺重姪方へ

贈被下、思召寄忝御志

不浅奉存候、下拙より相心得

御礼申上候様申候、扱御頼

被成候両品の事、とかく

相知し不申候、其内承合

可進候、此方一儀も

先よろしき様子ノ首

尾ニて候、必々御沙汰なしニ

御座候、左様御心得可被下候、

御頼之儀少も疎略

不存候へとも、少指つかへ

申事ニて、廿日前ニは

とかく有無ノ御返事

なるましくと存候、其内

随分承合て可進候、

心事其内期貴面、不備、

臘月十三日

〔寛政元禄十五年〕

追々書を下げて表記の如く示したが、まず本文を検討してみたい。巻頭の文言から今十三日・一昨十一日にも大石三平から書状を受取りながら、「会席」ゆえに返信を怠ったことを詫び

ている。おそらく大石三平は、しきりに書状を遣わし吉良に關する情報を要求していたのであろう。一方春満は「会席」すなわち弟子への講義のために返事を失したのである。当時春満は、神田明神神主芝崎好高邸において神道・和歌・文学などの講義を重ねており、芝崎をはじめ神職、武士、幕府大工頭平内大隅政治、前掲の中島五郎作宗五などの弟子を抱えていた。中島は春満に住居を提供しており、かつ大石内蔵助はじめ赤穂浪士の有力な支援者でもあった。

書状ではつぎに大石三平が春満の「姪」に餅一重を贈った謝辞が記される。彼女は春満の妹成子と一族の羽倉信元との間に生まれた政子、歌人として「真崎」と呼ばれる女性であり、当時江戸におり、のち春満の高弟杉浦信濃守国頭に嫁いた<sup>35)</sup>。杉浦は遠江浜松の諏訪社大祝であり、のち賀茂真淵などを育てて遠州国学の祖といわれ、東海地方一帯に国学を広めた人物である。真崎の江戸出府の詳細は不明であるが、伏見稲荷社の社家羽倉氏が江戸との関係を持っていたことを示しており、以後春満が長期にわたり江戸に滞在したことにもつながる問題である。

さらに書状では本題に入り、大石三平からの依頼のことがなかなか知ることができず、そのうちに聞き合せて知らせると伝えていいる。依頼の「両品」が不明とあるのは、吉良の動静と茶

会といわれる。「一儀」は首尾よいというが、前掲富森の書状から、「一儀」とは討入りの計画であろう。さらに書状では、決して連絡がなくそのことを承知してほしい、大石の依頼を粗略にしているわけではないが、差支えもあり、二十日過ぎにならないと返事ができないと伝えている。大石三平からの再三の書状があったことを考えると、依頼の内容は吉良義央の動向を知ることである。ただし繰り返し、依頼は粗略にしないが二十日前には返事はできないと語っており、本文を記しているときには春満も手を尽くしながらも吉良の消息を知ることができなかったのである。

しかし、尚々書は一転して「尚々、彼方ノ儀は十四日の様ニちらと承候、」とある。古くから注目されているように、「彼方」が吉良の茶会と在宅を示していることは確実である。それは前掲富森の書状に、吉良を「彼レ」とあるところからも首肯できよう。二十日以前にはわからないという本文と、吉良のことが十四日という尚々書には、明らかに矛盾がある。

一般に近世の尚々書（追而書）は本文の前あるいは行間に記し、本文のうち最も重要な内容を繰り返す文言が多く、現在の追伸とは意義を異にするとき、特記すべき内容がない場合には本文の前に段を下げて「以上」と記すといわれる。当時の書

状に追伸を記した尚々書の事例がないわけではないが、この書状はまさに追伸であり、本文を認めた時より後に本文とは異なる新たな情報を書き加えたものである。

すなわち春満は、吉良の情報が入手できず、本文を記して書状を出そうとしたとき、吉良が十四日に茶会を開いて在宅するという多少不確かな情報を入手して、尚々書に急ぎ書き加えたのである。尚々書の一行目が本文より墨が薄いという筆遣いも、情報が入手できずに詫びを繰り返すような筆が遅くなる本文と同じ速度で書いたというより、急いで書き加えたとみるべきであろう。従来尚々書の文言だけが注目されているが、この書状を出した十二月十三日には春満は確実な情報をまだ入手することはできず、自らも焦燥していたのであろう。

おそらく、前掲の富森助右衛門の書状に「明日客有之候段致承知候得共、無心元候間、斎勤ヲ以申来候積り」と見え、間瀬久太夫の書状に「斎キ手筋二而弥明日吉良殿江客有之候段承候得共、無心許候間」とあり、斎すなわち春満からの情報が不確実といっているのは、この書状に「ちらと承候」とある春満の不確実な文言であったと推測される。

以上から、赤穂浪士が春満の存在と情報の重要性を認識するようになったのは、元禄十五年十二月十三日に、春満が「彼方

ノ儀は十四日の様ニちらと承候」と尚々書に記した書状からであり、それまで大石三平だけに頼っていた浪士たちが、この文言により情報源である春満を強く認識するようになったと考えられる。それによって富森・間瀬の書状に「齋」が登場したのである。

## 五

十二月十四日昼ごろに、大石内蔵助のもとに大石三平から吉良在宅の情報が入った。討入りをともにしたのちに立ち退いた寺坂吉右衛門の覚書『寺坂私記』<sup>⑤</sup>が、次のように伝える。

一極月十四日之昼時、兼而申合候大石三平方より、上野介殿御事今日帰宅被成候由聞付、早速告来候、然る処江大高源吾も彼師匠方にて聞出し被帰候、上野介殿二三日中に手前にて茶の湯の会有之筈にて、支度ニ被帰候由ニ付、大幸之事と何もな、めならず歛候て、早速と用意被致候、

大石三平からの情報は、当然荷田春満がもたらしたものであ

り、春満は十三日に書状を記した以後、十四日昼までに新たに確実な情報入手したのである。「早速告来候」の文言に、春満から大石三平へ、さらに内蔵助へという速やかな伝達経路が見えている。春満がどのような経路で入手したのかは不明であるが、最後まで努力を怠らなかつたことは確実である。

一方で、茶人山田宗偏に弟子入りしていた大高源五も、山田から吉良邸茶会の情報入手し、浪士たちは早速準備にかかり、同日深更に吉良邸に討ち入ったのである。<sup>⑥</sup>

本稿では、荷田春満の動向を中心に赤穂浪士との関係を論じた。元禄十三年、江戸に出府した春満は、積極的に活動しながら歌学・神道・故実などの教授をさまざまな方面に広めており、幕府の歌道指南に就任することを目指していた。その中で、有力町人の中島五郎作、遠縁の大石一族や赤穂浅野家中、また吉良義央や家臣なども関係を持つようになり、春満が吉良の情報を詳細に収集しながら赤穂浪士を支援した経緯を述べた。ついで、元禄十五年十一月半ばには、荷田春満が赤穂浪士に好意を見せたにもかかわらず、浪士や大石三平は春満や中島五郎作の真意を疑っていたものの、十一月末には大石三平に吉良の情報を求めるようになった。大石三平の情報源は春満であり、大

石内蔵助や大石三平始め浪士たちが、次第に春満を信頼するようになっていった変化を説いた。さらに春満が浪士たちを支援し、浪士が討入りを決断した証拠とされる書状について、史料の状態とともに、書状の本文と尚々書の執筆に時間差や筆の動きの差があることを検討した。かつこの書状が討入りの決断を促すものではなかったことも論じ、討入りを決断させたのは翌日の十四日に春満が入手し、大石三平が同日昼頃に大石内蔵助のもとにもたらした情報であったと推論した。

なお春満は、赤穂浪士の討入りを支援した事実は生涯語らなかつた。春満の謙虚さや清廉さを説く著作も多いが、ひとつには後に幕府の古典籍収集事業に関与したため、幕府が処罰した浪士たちとの関係公表をためらつたのかもしれないし、吉良義央の家老として負傷した松原多仲が弟子のひとりであったことも関係しているのかもしれない。

筆者の関心は荷田春満の人的なネットワークの形成過程にある。元禄十三年から正徳四年まで十四年に及ぶ江戸在府期間に、どのような活動によって学問やさまざまな交流を広げていったのかを具体的に検討することが課題である。神職との交流やネットワークは古くから検討されているものの、武士との交流についてはあまり論じられていない。赤穂浪士の問題は特殊で

はあるが、武士に対する春満の活動の一端を知る好例であり、今後各方面の活動についての検討をさらに進めていきたい。

追記、この研究は、平成二十九年国学院大学国内派遣研究の成果の一部である。かつ史料の調査に当たり、赤穂大石神社飯尾義明宮司に特別の御高配を賜り、本書へ写真の掲載を許可いただいた。また赤穂大石神社学芸員佐藤誠氏、渋谷区教育委員会学芸員岡田謙一氏に御厚配を賜った。深く感謝する次第である。

注

- (1) 近年の研究成果として、松本久史『荷田春満の神道学』（弘文堂、二〇〇七年刊）、国学院大学『国学の始祖 荷田春満』（二〇一二年刊）。史料として『新編荷田春満全集』一、二巻（おうふう、二〇〇三〜一〇年刊）、『東羽倉家史料集』一〜三（国学院大学二〇〇七研究室、二〇一三〜一八年刊）。
- (2) 片山深淵『赤城義臣伝』一四卷五冊、慶応四年刊、架蔵本。
- (3) 角田九華『続近世叢話』八卷四冊、弘化二年刊、国立国会図書館デジタルコレクション。
- (4) 福本日南『元禄快拳録』（啓成社、一九〇九年刊、岩波文庫、一九八二年刊）。岩波文庫版の松島栄一「解説」を参照した。
- (5) 『赤穂義人算書』三冊（国書刊行会、明治一九一〇〜一一年刊）。



- (6) 大石無人良総(寛永四→正徳二年)は大石内蔵助良雄の祖父と従兄弟。赤穂浅野家に栄えていたが寛文六年に浪人、以後江戸に出ており、赤穂浪士の支援者となった。長男郷右衛門良磨は弘前藩津軽家に仕え、二男三平良毅は赤穂事件当時浪人で浪士の支援に奔走した。弘前大石家文書の中には大石三平宛の史料が多いが、父無人の手に保存された石神社に寄贈されたものであろう。大石家文書は一九六七年に大石良書の子孫に残されたであろう。大石家系図正纂『赤穂義士史料集二(新人物往来社、一九八〇年刊)』、『赤穂義士事典』(赤穂義士事典刊行会、一九七二年刊)、『赤穂大石神社の名玉』(大石神社、二〇一二年刊)。注7参照。
- (7) 大石三平良毅(延宝三→寛延三年)は、大石無人の次男で赤穂浪士大石瀬左衛門の従兄弟に当たる。元禄三年近衛家に仕え、同十年浪人して江戸に住み、元禄十五年には二十八歳で父無人とともに赤穂浪士を支援した。のち宝永二年讃岐高松藩主松平家に仕え、書院番頭・横目・弓足軽預などを歴任し三〇〇石を知行し、隠居の後七五歳で死去した。子孫は高松藩に仕えた。『大石家系図正纂』、『赤穂義士事典』。注6参照。
- (8) 弥富破摩雄・久保田米斎編『義士帖』(大塚巧芸社、一九二三年刊)、国立国会図書館デジタルコレクション。
- (9) 弥富破摩雄『近世国文学之研究』素人社書屋、一九三三年刊。
- (10) 徳富蘇峰『近世日本国民史』元禄時代中巻義士篇(民友社、一九二五年刊)。明治書院刊行一九三六年普及版を参照した。
- (11) 中央義士会編『赤穂義士史料』上中下巻(雄山閣、一九三一年刊)。
- (12) 三宅清『荷田春満の神祇道学』(国民精神文化研究所、一九四〇年刊)。同氏『荷田春満』(歌篋書房、一九四二年刊)、同氏『荷田春満の古典学』第一巻(自家版、一九八一年刊)に再録。
- (13) 松島栄一『忠臣蔵』岩波新書、一九六四年刊。
- (14) 荒尾親成『荷田東丸大人筆蹟のことも』(『朱』七号伏見稲荷大社、一九六九年刊)。
- (15) 大石神社編・佐々木杜太郎校注『大石家義士文書』赤穂義士史料集三(新人物往来社、一九八二年刊)。
- (16) 菟田俊彦校注『神道大系』論説編二十三復古神道(一)荷田春満(神道大系編纂会、一九八三年刊)。
- (17) 赤穂史会編さん室『忠臣蔵』一卷 一九八四年刊。執筆は八木哲浩。林尚右『大石内蔵助秘話』自家版、一九八七年刊。
- (18) 平成十五→十八年度科学研究費補助金基盤研究(B)「近世国学の展開と荷田春満の史料的研究」研究代表者根岸茂夫、平成二十二→二十五年度科学研究費補助金基盤研究(B)「近世における前期国学の総合的研究」研究代表者根岸茂夫、平成二十七→三十年度科学研究費補助金基盤研究(B)「近世における前期国学のネットワーク形成と文化・社会の展開に関する学際的研究」研究代表者根岸茂夫、など。
- (19) 堀部弥兵衛金丸の経歴については、『赤穂義士事典』を参照した。以下登場人物について同書を参照した。
- (20) 『赤穂義士史料』上巻、二二六頁。本書の頭注では、荷田春満が大石内蔵助に語った話とあるが、赤穂市史編さん室『忠臣蔵』一卷、一六五頁などに見えるように、荷田春満が大石三平に語った内容である。
- (21) 「下市」は吉良上野介義央の茶人としての号である。
- (22) 『赤穂義士事典』一七二頁。
- (23) 東羽倉家文書『蒙神学正伝之約契』(平成二十年度國學院大學特別推進研究「近世における前期国学の総合的研究」成果報告書『荷田春満門人一覧稿他』二〇〇九年刊)。
- (24) 元禄十六年十一月十日「羽倉信元宛荷田春満書状」。本書は二〇一五年に羽倉信明氏から國學院大學に寄贈され、現在國學院大學図書館所

- 蔵。菟田俊彦校注『神道大系』論説編二十三復古神道(一)荷田春満、三四八頁。
- (26) 『忠臣蔵』一卷、一五六―一八八頁。
- (27) 『義士帖』、『赤穂義士史料』下巻、一九六頁。『大石家義士文書』一三二頁。『忠臣蔵』三巻、三三九頁。
- (28) 『赤穂義士史料』下巻、二一八頁。『忠臣蔵』三巻、三六二頁。
- (29) 大石神社所蔵『義士手翰』壹。翻刻は『赤穂義士史料』下巻、二四二頁。『大石家義士文書』二四五頁。『忠臣蔵』三巻、三七四頁。
- (30) 大石神社所蔵『義士手翰』壹。翻刻は『義士帖』、『赤穂義士史料』下巻、二四四頁。『大石家義士文書』一三三頁。『忠臣蔵』三巻、三八一頁。
- (31) 『義士帖』、『赤穂義士史料』下巻、二四七頁。『大石家義士文書』二〇七頁。『忠臣蔵』三巻、三八四頁。
- (32) 大石神社所蔵『赤穂浪士四十七人之内書簡類』。写真は『義士帖』、『赤穂大石神社の名宝』。翻刻は『赤穂義士史料』下巻、二四七頁。『大石家義士文書』二五八頁。『忠臣蔵』三巻、三八五頁。
- (33) 『赤穂浪士四十七人之内書簡類』。写真は『義士帖』、『赤穂大石神社の名宝』。翻刻は『赤穂義士史料』下巻、二四八頁。『大石家義士文書』二二二頁。『忠臣蔵』三巻、三八五頁。
- (34) 前掲、東羽倉家文書『蒙神学正伝之約契』。
- (35) 羽倉敬尚「浜松人杉浦貞崎女の業績」(鈴木淳編『近世学芸論考』明治書院、一九九二年刊)。内田旭「杉浦国頭の生涯」(一九四一年刊、遠江史料叢書八「内田旭著作集」二、浜松市史蹟顕彰会、一九九四年刊)に再録。
- (36) 『寺坂私記』(『赤穂義士史料』上巻、二六八頁)。『寺坂信行日記』(『忠臣蔵』三巻、二四〇頁)。
- (37) 赤穂市史編さん室編『忠臣蔵』一卷、一八二頁では、赤穂浪士の吉良

情報の入手は大石三平・荷田春満のルートが主であり、大高源五・山田宗偏のルートは偶発的な情報であって、後世に俗説が拡大して有名になったものと叙述している。大石内蔵助は元禄十五年十二月十四日「寺井玄溪宛書状」(大石神社所蔵、『忠臣蔵』三巻、三九九頁)に、大高源五が町人の姿となって山田宗偏に入門し、吉良邸の茶会の情報を掴んだと記しており、大石三平や荷田春満については記していない。ただ寺井は元赤穂藩医であり、大石内蔵助は元浅野家中に同志の活躍を喧伝しているのであり、とくに藩外の三平や春満の動向について記す必要がなかったであろう。